

Pensoj flugas trans la land - limon

# Senryu Zasshi

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可  
昭和廿五年三月一日發行第五卷第三號

(每月一回一日發行)

創刊大正十三年・通卷二百七十四号

麻生路郎☆主宰



川  
柳  
の  
旌  
証

三月號  
No.274



# 評句 川柳街 (上)

東京 宮田不二  
 横濱 福田山雨楼  
 名古屋 吉田水車  
 岡山 浜田久米雄  
 大牟田 高田抱逸

る筈だと思ふ。

大の字にごろりとうちの  
壘なり 古方

ちびた下駄はけば身に染む秋の風 幽王

不二 ちびた下駄の主は薄給のサラリーマンの妻君か、

それとも失業中の夫、と云つたようにこの句を現実のきびしい世界を詠んだ悲しい句としてのみ味うには余りにも美しい面を持つているように受取られました。芝居好きの僕にはこの句を読んだとき恰も新生新派の舞台面を覗きつけられたような気がしました。下町の女房が小唄か何かの合方につれて花道えさしかかろうとする淋しい、そして美しい風情。まるで深水の絵にでも出て来そうな人物を想像させられたわけです。貧しさの中にある美しさをよく捉えて綺麗にまとめた作者に敬意を表します。主観の句ですが秋

の風によつていつそ淋しい肩の線を客観視した僕をお許し下さい。

久米雄 ちびた下駄と秋風の

対照の面白さだけのもので、じーんと心にふれて来る川柳的な感じが少いように思う。生活断片としての記録にすぎない。

抱逸 炭坑町に生れ育つた小生にとつて四十年來いつも接している風景を、巧みに表現された点に敬意を表し一面下駄の主に対し一入同情に堪えぬ感じですが。不二さんの申される通り主観の句にして「冬の風」とでもしたら「金づまり」の此頃にふさわしく、もつとく哀れさをもつことでしょう。  
水車 ちびた下駄えの感傷が秋の風と共に身にしみたらしたら、それは生活えの反省

とも云えよう。

山雨樓 表現が説明調で安易な感傷に終つて居る。ちびた下駄は何程かのユーモアを見せているが、これと秋の風との結びつき或は因果関係はただそれだけで一幅の詩をなしているのだが、それを生じつか説明したため余韻のない句になつた。含みがなくなつた。身に沁むと云つてしまつてはいけなかつたのだ。又秋の風も常套的でむしろ秋の道とか、秋の空ぐらゐがよかつたのではないか。兎に角もつとつきつめた表現せつばつまつた境地をさぐり当てるべきであつたと思う。提出者の讃辞はこの句を脚色した頭で評しているからだ。忌憚なく申せば作者の生活が本当に出ていないのだ。作者はもつと深い観照と思索の中に立つてい

る筈だと思ふ。大の字にごろりとうちの壘なり 古方

不二 自分の家ほどよい処はないとは昔からよく云われて居りますが、近頃のような御時世では一層その感の深いものが有り、この句によつて自宅の壘えの有難味に対し感謝を表して頂いた点がたまらなく嬉しかつたです。着想と云い表現と云い一見ともすれば平凡のように思われますが、さすが老巧の古方さん、軽味の極致は僕の最も学びたいところですが、何かしら俗界を離れた大の字のごろ寝に限りない禪味をさえ感じられます。作者古方さんの巨体の大の字を想像します時ほほ笑ましい点もうかがわれます。

久米雄 一二回見たことのある古方さんのあの巨体から出た句としてうなづけるものがある。句の持つ淡白さ、すばりと云つてのけた表現に敬意を表する。  
抱逸 瘦身の自分にはあまり不向なゴロリ、巨体評判の古方さんのように肥つてみたい慾望でたまらなくなりまし

男女両性に作用する  
**プレホルモン**  
 塩野義製薬 皮下注射・錠劑

た。前者が申されたので別意見はありません。  
水車 此の場合なり止めは利いているが、「古壘」としたら如何、壘の感觸は宿命的である。  
山雨樓 一茶風の句であるが淡い咏嘆に終つて居る。そこにある覚りが見られぬでもないがこの十七字は充分な反撥力をもつていない。さらりとした豆腐のような舌ざわりですぐのみ込みたくなるような軽さがある。  
二十年前に路郎先生の句で「寝轉べば壘一でふふさぐのみ」と云う夏の句がある。こ

の句に対して半文銭氏は「たまむし」誌上に作家批評を寄せて、「人間の最後の所有は壘一でふに過ぎないと云ふ諦観である」と評していられるが味解が足りない。諦めは諦めでも一つの意味を帯びているのだ。

類句と云う問題は川柳永遠の重荷であるが二句をならべて見るとき、その思索と云うか感懐と云うものに懸隔のあることに氣附くであらう。樂天家と想像せられる古方氏の哲学には毒舌を挿む余地もないが、川柳としての藝術性には未だしの感なきを得ない。

### たち寄れば母の聲する

粗・影

花芒

山雨樓 何かの事情で母と別居している身。たま／＼訪れると一入懐しい母のいそ／＼とした表情がたまらなく嬉しい。寂しいしかし澄み切った天地の秋色にそぞろ愛郷の念が湧き起り、いつまでも母の傍にいて慰めてあげたいころがうづく。この句の場合花芒は一つの添景でもなく季節でもない。象徴された田舎の蕭條たる秋色である。情景の中に愛切の感傷が一滴のイン

キを滴らしたように溶けこんでいる。——洗練された表現である。

不 二 幾つ何十になつても「母は有難きものなり」です。その懐しい母を去年失つた僕にとつてこの句は異常の迫力を示して呉れたことを喜びます。母の声こそ人間愛の権化と云つても過言ではないでしょう。それだけに今は母のやさしい声を失つた僕は悲しみ新たなものを感じました。ただ／＼作者の幸福が羨しい次第です。

水 車 たち寄ればと軽く出て居るのでそう遠方迄母をたづねに行つたとは思えないから、母の相変らぬ達者相な声だけ聞いただけで或は句主は帰つたかも知れない。そして花芒さえも賞でる余裕があつたのであらう。すんなりとした句と思う。

久米雄 私は秋の色の中でゆれて咲く花芒のあたりに近づいたとき、なつかしくも今は亡き或は故郷の母の声がしたように感じられて、なつかしく又うれしい感慨に耽つたものと解する。この句から受ける感じは洗練された川柳詩的俳味である。

### 抱 違 父母と早く別れて養子に來た自分にとつて殊の外なつかしい句と云います。年に一度か二度訪れると町の温泉に連れられて行つた少年時代が偲ばれてたまらなくうれしい。なお句のもつ崇高な親心にほんど頭に下ります

山雨樓 この句に対して各評者はセンチメンタルに陥つたようであるが、久米雄氏が一寸触れたように俳味は否定できぬ。川柳味と云うよりはむしろ人情味が勝つている。若し評点するにせよ自分は七十五点ぐらいのところだ。

### 鐵骨を霧は黙つて抜けて

夏 六

山雨樓 擬人法である描写がいかに巧みで所謂川柳的な自然觀察に思わす打たれた。美えのカットが警拔なからである。こう云う句は生活派に云わせると遊離したと非難するかも知れないが、美えのあこがれは万人共通でなければならぬ。どんな境遇にあつてもこころの余裕は持ちたいものである。作者は他の句から見ても豊かな詩情の持主であることがわかる。

不 二 外國映画でよく霧の

美しさを見せられていたが、この句は丁度カメラに代つて川柳で上手に霧をキャッチした点その手腕のほど大いに學ぶべきものがある。川柳の材題はうかつな吾々の眼前に常に美しい姿をもつて横たわつていかに氣附き、この句によつて川柳眼の一層の開発に僕は鞭打たれた形です。

水 車 この句から柳味を得るのはむづかしいと云うのは、山雨樓氏の申される生活派的作句態度の観点からのことであつて、かかる見地からすれば重視されないかも知れぬ。しかし川柳が美を探求していることも一要素であつてみれば、今頃云うもおかしいがこの句の行き方に今後の川柳のあり方を汲みとらるべきである。私の考えからすると感覚調の句は往々にして一般読者に訴える反響が少いのは実際に体験するが、説明調いわゆる生活派的な句は大向うの受け方がよいものである。と云つて何時迄も低徊

趣味な句ばかり作つていたのではさかしく問題種になりそうである。この句のとり上げられた所以もその辺にあると信じる。

久米雄 自然の、ともすれば感じから捨てられそうなる美しい描写を「黙つて抜けて出る」とした表現に敬服する。この美しさはおそらく詩を作つていない人には無頓着で過ぎて行くだらう。川柳の徳もこの辺にあると思う。

抱 違 工場町に住む自分達にこうした風景に度々ふれてゐるものいつも見逃している。作者の感覚的描写の巧妙さ感服に堪えない。

山雨樓 この句も各評者は過褒を與えたようであるが、若し採点せば自分は前の母の声の句をしのぐものとは思わな

最短時間で結ぶ  
大阪・名古屋  
3時間25分  
毎日3往復  
上水町発 7.40 12.40 16.40  
名古屋発 8.05 13.05 17.05  
近畿日本鉄道





大阪市 中島生々庵

耳打ちへ議長視角を変えぬ也  
ストの朝古武士の如く馳せ参じ  
年賀狀三男四女でまだ生む氣

某氏へ

寂しからずや七十にして節を狂げ

大阪市 浪 玲之介

ドブ酒に過去も未來もない厨

元旦や又厄年がこつち向き

筆不精いきなり餅を送つて來

猫或日狂うたように木に登り

横浜市 福田山雨楼

又元の國鉄に勤務

窓の外機関車の煙なつかし

國鉄文藝賞に入選

授賞式女流作家とならび立つ

池田市 戸方古方

猫さんを番する役も大晦日

金詰りの屑蘇をこゝでものまされる

氣が合うてだまつてまけた古木屋

布哇 内藤草一郎

受け入れの態勢で彼は酔ふて居る

出すものを出してふざけて頂戴ね

今晚は声と匂ひが流れ來る

青春を意義あらしめて吞むときめ

泣き伏した姿は春の山に似る  
肉親の遊戯か親を欺すのは

岡山縣 浜田久米雄

失言はアブレゲールのせいにする

三朝、玉造温泉廻遊

山中に閑あり効能書を読む

浴槽につく／＼やせた足が伸び

混浴のこれが女の乳房かな

平塚市 木村孤浪

大きくは云うが抽籤氣にかゝり

風呂場からでかい返事はワンヒント

復員が出てると眼がね添えて出し

大牟田市 高田抱逸

足音に姦婦神經使ひすぎ

珍客の心を知つてもてなさず

某新制高校生

「校長ひつこめ」早や赤色の眞似をする

布哇 市岡曉舟

頬紅が濃い過ぎますとも云へず

まあいやな誰がそんなに吞ましたの

役得のドンチャン騒ぎ十二月

あけすけの税をどられる公務員

懐しやうどん屋出前ははじめたり

妻ノ口と亭主ノ口とで稼ぎ蓄め

史業氏結婚

君僕で氣軽に出たりホネムーン

名古屋 吉田水車

合の手はじやまくさそうな浪花節

ヘッドライトへ女少しもためらはず

独りして吞む一合の多いこと

コンニャクの客へ屋台は返事せず

けつまづく石ふり向かず十二月  
十二月手ぶらで居つて叱られる

大阪市 正本水客

線路から見えるわが家の戸が閉り

別居していることも集金知つて居る

階級を意識している猪口を受け

レコードの合間に恋の対話する

内弟子として豆さんの煮えを見る

神戸市 竹内潮花

初夢に來たわ噂のなかのひと

素晴らしい手品だ糸が見えてます

中座出て道頓堀の雨に逢ひ

素晴らしいあいそづかしをして十九

大阪市 北川春巢

花活けて舞台も春の色になり

ハンストの目に果物がよく賣れる

サントリー床の間に据え寝正月

戦前派説明のいる唄を出し

奈良縣 尾崎方正

發育の熱スエーターから漏れてくる

長距離へ荷物を載せて隅に座し

犬連れて暖かそうに妾行く

幸運へ晴後雨を想はざる

老ひてなほ多情多恨の続くわれ

湯川博士アメリカ行き

ノーベル賞身近にあつた船出なり

風はひよう／＼生るつらさへ輪をかける

菱二寸そのまゝ冬へ突入す

十二月ネオンも悪魔の色となり

はゝの手に土の香がある日本晴

鳥取市 中島鉄洲

お正月子のポマードで髪を分け



中道を行くかアロハわ着こなせず

大観画伯にして富士は未完成なりと

女相模が出ぬが不思議の此目頃

大阪市 新川 博也

ふごころで財布にぎつて飲んでおり

生申妻は知らずともかく生きており

母小さし末の子よりも小さくなり

大阪市 橋本美奈子

サンドキツチマン責任のある顔でなし

あの人が人妻と知る雨の駅

出雲市 尼 緑之助

明けて幾つ子供も親もまごつかせ

元旦の計も過ぎたり五六日

大阪市 水谷 竹莊

やりくりの世帯を知らず子は肥り

おつちよこちよいどいわれて嬉しい酒に酔ひ

薄情と云はれてもよし捨てた恋

旅靴たゞ一日の恋でよし

廣島縣 弘津 柳慶

避妊薬それでも妻は不安がり

大阪市 稲葉 鳩花

恋されてからは違つたペンで書き

負けてゐる將棋へ丁度よいお客

下関市 國弘半 休門

北の風ポイントマンを凍らせる

八代市 佐野 ト占

支那そば屋淋しがらせて曳いて行き

婦心矢の如し故郷の山や川

大阪市 吉田 斜水

アンブルのかけら冷たく見つめて寝

暫らくはあくびをさせた様に齒科

お隣の咳が聞えた十二月

賣出しの声も忙しい披露機

当分はお嫁に行かぬ靴を買ひ

結論をいゝ加減にして外交家

布施市 糸本 醉月

心臓の強さを税務署と競べて來

知慧淺く浮氣をさせぬコツを知り

隠し藝それから社長のお氣に入り

旧師の三十五回忌  
尼崎市 小林 文月

酒なくもはるかの空に合掌す

はんば公職みなやめたるかとも思ひ

甥大映に入社す

スター等を敬称で呼ぶ身となりぬ

孔一つあけるに車掌がちつかせ

岡山縣 山分 淑郎

ふり返る暇あらばこそ十二月

病室の窓から秋が見えだした

宿命のホクロが秘書をパンプにし

秋の風自信ない顔もうマスク

幸福がやつとわかつた審判所

ハンドバック附録通りに持つており

大阪市 篠山 露彦

初日の出スキーで拜めるよい身分

初夢に越年闘争まだ続き

すぎ焼のどころへ税務署やつて來た

奈良縣 飯降 白香

もみちより宝塚がよいという生徒

時雨空観音さまもお寒がる

奈良縣 西辻 竹青

恋ならず事務へ同じ席とかや

嫁しつけて寝間の廣さよ母淋し

春、夏、秋、ふゆの楽しい身とはなり

思慮淺き女の淋しき後姿

千円の酒をよばれてくだを巻き

山口縣 長野 井蛙

採算を言ふて鹹る下心

裏切つた女都會に裏切られ

吳市 林野 甍光

激刺と恋は吹雪をためらわず

大阪市 竹田 芦穂

先客の氣焔嬉しい繩のれん

親馬鹿か子供齒痛にして終い

京都府 間島 青丹子

万年床寒々寮へ歸つて來

壊された事もうれしい子のおもちや

大阪市 上田 春柳

三十を忘れて羽根もつゐてみる

布施市 森下 愛論

子の夢は家計狂はすクリスマス

子を抱けば明日への希望新らしく

終電で歸りうつり香せめられる

北浜を歩く靴のふくれ様

銀行に縁なく今日もマツチ貼る  
大阪市 太田 良子

ボーナスが出た事にして見積りし

何んとなく好きだと娘言うただけ

金のない事は解つて居りますが

老らくの恋が此処にも咲きました

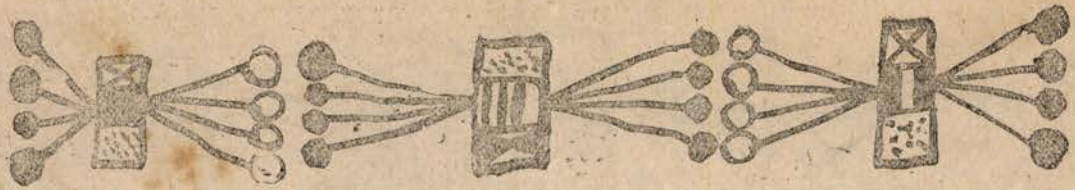
職場とは別に会ふ日を約束し  
大阪市 松江 梅里

手の切れる千円札で首になり

湯川古橋藤村につぐ絹代

大阪市 伊藤 定美

わたし一人がいちめられてゐる世間



岡山縣 丸山弓削平

慰謝料をとつてやつたに浮かぬ顔  
妻病んで子の神妙さを語り  
恋やよし雪にわだちを残せ馬車  
クリスマス駝鳥の様に夫人降り  
スリッパで社長大きく送り出し  
新妻の病氣は会社休ませる

岡山縣 直原七面山

永らへたお蔭でチトズマヨネーズ  
強盗へ時計の振子あわてない  
大火事へ村のポンプは修理中  
敦へ子に金の無心を言つてみる  
寝過して良かつた汽車が脱線し  
旅先に來てもやつぱりけちん坊  
おつとりとしてゐて金を良く儲け  
温泉行スリに變更させられる

岡山縣 黒田笑泉

お隣りにミシンがあつて仲が良い  
窓開けて新妻派にはたきかけ  
おゝその目止して下さい未亡人  
デパートで逢つて映画で別れてき  
あのお尻り帯でバランス取つてあり  
税金の掛らぬ窓だやり給え  
あら嫌だ他人の兒ならば抱く夫  
耳飾り付けて妾は派手に生き  
お隣りはお隣り家はお粥です  
共稼ぎ夫婦れば妻は出で  
公益社何れは俺も此処の世話

岡山縣 黒田笑泉

何頼む積りか一升おいて去に  
年玉へ長男次男の差をつける  
エロ本が二三冊讀科待合所

宇部市 上林粗影  
岡山縣 黒田笑泉

水の色俺の心に似て青し

駄足で來る不幸を金で済ましとき  
日給の呼び捨てに慣れてやほら立ち  
遺兒一人あれど美貌が仇となり  
教養と言ふのが又も邪魔になり

鳥取市 河村日満子

飲むことにネクタイ締めて背廣着て  
残つたでする雑炊となりけり  
嘆願書パラ／＼とめくられる  
絶えている線香身内がまた見付け  
葬儀屋のお指図を待つよろよろと  
村委せ年寄委せ葬儀済み  
名人戦かなぞと職長趣味がなし

兵庫縣 田代尋四

びつこかど見れば鼻緒が切れてゐた  
歓迎をしない顔してまあ上れ  
歳一つふへぬを翁不足なり  
残りものばかり集めて妻は食ひ  
家事裁判所出ればおいとほもう呼べす  
寝正月もようせぬ妻の初仕事

兵庫縣 家沢齊花

元日だ鏡子の零しぼるまい  
もう一つ雑煮いかゞ言える春  
仕立物やつと届けた初日の出  
停年を内助にたより生きんとす

滋賀縣 黄瀬美秋  
いゝ金をとるので嫁に出しそびれ  
花嫁のまだ舌を出す癖があり  
産制の網をくゞつた子が生れ  
親切な医者で余計な注射もし  
岡山縣 藤本満年  
ワンマンパーテー一寸末席騒がしく

ヤミでない雑煮を食べる春も來て

破々ど討入り姿の夜警が來  
やめていた酒を賞與がはじめさせ  
食ひ惜しみクリスマスケーキ固くなり  
賣出しへたゞ汽車に揺れバスに揺れ  
大兵も三人掛けの氣ではあり  
もみ消しに行く間に夕刊出でしまひ  
なんとなく身投のしたい池の水

熊本縣 西口如川

理性それは満腹の後だつた  
未亡人話は過去へ廻り  
孤兒の行く処オアシス見付からず

金沢市 安川久留美

馬の眼は涙を見せず轡をひき  
善惡のいづれも強し生きている  
台湾から帰つてヤミの値を覚え

松山市 前田伍健

兄妹の争ひ母が詫びてすみ  
諸流活花大会上品な火花ちる  
土産もの子規漱石も菓子になり  
すだれよりましなタオルを貸してくれ  
白いものチラ／＼などと飲仲間  
大阪府 橋本緑雨  
南天の実が落ちてゐる庭の三ヶ日

岡山縣 藤本満年

**胃酸過多**

胃痛・胃潰瘍に...

**ホルモザン錠**

45錠入

大阪・武田薬品工業株式会社



# 窓

麻生路郎

## 川柳と漢字制限

思はないが、せめて文藝物だけでも「し緩」は「弛緩」であり、「花こう岩」は「花崗岩」であつて欲しい。「花崗岩」が「花こう岩」であることは、名人の陶器に、ヒビが入っているよりも、もつと味気ない気がするのである。仮りに、「し緩」と云うような文字で表現されたとしたら、知能の低い人たちは、「弛緩」の「弛」の字を覚えるよりも、もつと解釈に苦しむのではないかと思はれる。

「朝日」に掲載されている小説を眺んでいると、「けい流」だの「戦りつ」だの「雨外とう」だの「落こ者」だのと云う、漢字制限による、ヘンテコレンな、語彙がのべつ幕なしに出て来る。そして、それ等の平仮名には横に、ハが附してある。私はこんな小説をテン／＼小説とか、チヨボ／＼小説と呼んでいる。

こんな小説を眺んで、テン／＼やチヨボ／＼にぶつつかると、飯を喰べてる時に、砂を喰んだやうな氣持になる。そして作者が、食うために書いてるには違いないが、それをハッキリ認識させられていやな氣持になる。その点「毎日」に最近掲載された谷崎潤一郎氏の「少將滋幹の母」には随分むづかしい漢字も出て来たが、従来通りの漢字を使用して、いゝ感じで読了することが出来た。

「朝日」のような大新聞で、「し緩」だの「花こう岩」と書いて、活字がないとは誰も

い。「朝日」や「毎日」のような大新聞が共同声明を發して、文藝的作品に限って例外をつくることは、その難事ではあるまいと思ふ。

文藝の一例にある川柳も又、漢字制限の束縛を喰まない訳にはいかぬ。漢字を制限する以上、漢語の多くを廃して、新しい日本語を作成するのだから、眞にその目的を達成する訳にはいかなければ、「嶺」に代る文字を作らねば、「分水嶺」の同意語を新に作らねば、少くとも私には下駄と靴を片方づゝ履いている感じがするのである。「腐らん」は「腐爛」であるが、「くさりん」と読んだらどうなるのであるか、腐らんでなくて腐るのである。

漢字制限が文部省によつて發表された時に、私は敢えて反対はしなかつた。が、それを鶏呑みにしたのではなかつた。その当時読者から、いろいろ質問があつたが、「川柳雜誌」では従来通りで、個人的に答えておいた。印刷屋が従来通りの活字を使用して、くれ以上文句はなかつたからである。

文部省の目的は廣く國民、大衆の知能を考慮しての革新であつて私たちの文藝的作品を標準外におくものと、自ら判断を下して、今日に及んだのである。私たちは好んで規則を破らうとするものではない。新仮名使いにしても違意の文にはつとめて、これを用いて

るが、やむを得ない場合には混用しているのである。

右に述べたような理由で、私たちは川柳の表現上、漢字制限には触れず、従来通りの漢字を駆使しているのである。しかしながら、漢字制限を適法して作句されていゝ人たちがあつたとしても敢て反対はしないのである。(二月本社旬会席上講演の一部)

## 題に執着せず

有咄 並木東田樓

「川柳雜誌」十月号「旬会の句から語りはじめた座談会」といふ記事中で、麻生路郎乃女史が席題に就て、その題からうまく生かして

て詠み込まれてあるときは一寸胡魔化されやすいですが題を抜きにしてその句を考へた場合、案外川柳として、下らない……と音ふより、左ほご感心しない句である場合が多い、云々。また更に曰く、作句の態度が題を目標としておきますために、自分としての心のあり方の現はれやうが少くないのであります、云々。と申されたお言葉に、私はハツとして悟道が開かれたやうな明朗な氣持を感じました。席題にせよ、兼題にせよ、題に執着せず、自分としての心のあり方の現はれこそ一番大切な事だと始めて夢からさめたやうに悟りして頂きました。乃女史のお言葉は、題を得て作句する場合に、是非共心懸ければならぬ一大名訓であると私は確信するものであります。

麻生路郎著 水武書房版



好評噴々

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書  
本書は著者が多年のウチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して進むところ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年用柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版 二一二頁 定價 一〇〇円 綴装 金四二四  
取次御注文は 大阪市住吉区万成五丁目二五番地  
川柳雜誌社 電話 日居大阪七五〇五

川柳雜誌社



## 川柳と宗教

戸田古方

### 一 藝術と宗教

大哲学者、大道徳家はいうに及ばず、大政治家、大藝術家、大科学者はいづれも多少とも宗教に通ずるものをもっている。政治家聖徳太子、文豪トルストイ、科学者ニュートンの成功の背後に宗教的信念のあつたことは誰でも知っている。眞、善、美が聖に統一されてゐるからである。宗教を拒んだ大達人も捜し出せるかも知れないが、たゞ意識の上に宗教がのぼらなかつたさうだけで、彼の人生観の中にはきつと宗教的なものを藏してゐたにちがいない。事実さうでなければ己を空うして大業を仕遂げることが不可能なからである。大さうの字は大手をひろげ、両脚をふんまへ、すべてを包容する形である。清濁合せの心のひろさ、か様な人

にしてはじめて大をなすことが出来るのである。

反対に小は同じ人でも、手をすばめ、足をすばめた形象である。人間が他人とともに社会生活をしてゆく上にどちらを選ぶべきかはいうまでもない。

眞、善、美は聖に通ずる。美を生命とする藝術と聖を具現した宗教、宗教も藝術も感情の世界のものださういふ点で一そう緊密なむすびつきをもつ、わかりやすくは喜怒哀楽の上立つ二つであり、表現技術を習得すれば、それは藝術になり得るのである。

宗教は喜怒哀楽の卒直な認容から入る。喜怒哀楽と素裸で取組む時人々は幸、不幸にめぐり合う。幸を求め、不幸をいさうのは人情である。不幸をかなしむ心があればこそ、幸を喜ぶ心が生れる。よくよく考へみれば不幸に

悩む如く、幸にあつても悩まなければならぬのである。なんとかなれば幸も不幸も永続性をもつものでなく、輪廻とめぐり来るものであるからである。樂は苦の種、苦は樂の種であつて、悩は悩を自覚出来なところよりおこる。もし人間に悩みがなかつたら案外淋しいものかもしれない。悩みがあればこそ詩が生れ、絶對を求める信仰が生れる。

信仰の根拠は正信でなければならぬ。正信は悩みを解脱させてくれる。正信の根拠は正知でなければならぬ。正知を体得して、正行を行う、正行という実践は全く正信の結果であり、これが悩みを克服する。正しい宗教のあり方である。

藝術の表現にも正知と正行を含んでゐる。正知と正行の上に正美が生れる。

信仰の正行は藝術表現の正行に通じるものをもつてゐるし、藝術の正行は何人にも愛され、親まれ百万人の信仰に通じるみちを示してゐるといえる。

### 二 川柳と宗教

人類の歴史は数多くの宗教美術をのこし、万巻の宗教文學を生んだ。又人口に親まれた宗教音楽も少ないわけではない。しかしこれらはいづれ

も鑑賞藝術である。鑑賞を通して幾千万の信仰の心を培つたことであり、これが功績は過去とともに未來に期待されよう。

しかし鑑賞は何んといつても消極的である。鑑賞には自分の力でするもの、他に批評家の鑑賞をたよりにして鑑賞する場合もある。ことにひとの批評をみて鑑賞する場合の心理は一考する必要がある。創作家は外界の刺激によつて情緒がうごかされ、彼の習いおぼえた表現技術によつて藝術するのである。さうした作品が鑑賞家に向ひ合う。だが、その時鑑賞家は創作家と同じ刺激を受けるとは断じがたい。鑑賞家が作品からうける刺激は創作家のそれほど純粹ではない。しかも直接鑑賞するのでなく、その間に批評家が介入するとまたいさう複雑になつてくる。

鑑賞は感じることによつて得られるとしても一應の説明を要する。説明はあくまで説明であつて、説明とは創作家の意図の解釈である。ところが解釈さうなものには仲々むづかしくて、結果を一つに定めしめると限つたものではない。客観的、普遍的な解釈はあるとしても、細部に於ては主観がまじることによつて異説が立つ。

十月例会に於て鮎美氏の句

評のなかで

「花を愛す 今日儲けを考へ乍ら 幽王」

の解釈にしても、花どころでない今日の儲けを考えながら花を愛する悲哀とゆう意味と、單純に儲けを胸算用してゐる前に花が生けてあつたさう意味だと二通りあげていられた。川柳にかぎらず解釈さうなものに異説はつきものである。

鑑賞は理解であり、心理的考察を通してなされるものである。だが創作自身にとつては他人にどう思われようとも、意図をもつていて、それは最初目論まれた通り表現されようが、されまいが貴重

**血圧降下には**

**アーグレン**

血管アウトホルモンとアミン塩類

山之内製薬



なのである。創作は創作されたる結果である作品より、創作過程に大切なものを含んでいくように思われる。旅行を計画して旅に出るまでの楽しみ、旅に出てしまふと、その楽しみは半分以上すんでしまふ。又旅に出てからの楽しみも準備期に於ける心のもち方、準備の仕方での楽しみは決せられるともいえる。これは恋愛と結婚の場合についてもいえる。恋愛期間の正しい、しつかりした心がまへの如何が結婚を墓場にもし、墓場にもしないのである。

只今発表は第二義的なものだといつたが、それだといつて全然頭の中に生れ、頭の中で消えるだけでいいとゆうわけではない。発表という背水の關係におかれてこそ、産みのなやみが感ぜられ、眞剣な努力がはらわれるのである。その努力が個人的に、社会的に人生に役立つ。そうでなければまるで遊戯に終るのではないかしら。発表さげらひがいたづらに頭の中で生れては消える作品の幻に酔う場合こそ憶病な責任のない遊戯だといわれても仕方があるまい。それについて思ひ出されるのは大雅堂の話である。竹の絵を所望されながら何時まで待つても出来ないで再三の催促をうけた。きびしく追ひつめ

られた彼は遂に相何杯かの竹の絵の反故を目の前にひろげたとゆう話がある。誤解なく己が意途に共感され得る作品を産み出すまで努力に努力を重ねていたのである。彼のこの態度こそ憶病ではなく、創作家の範とするに足るものであつたのである。

鑑賞は鑑賞のためのものではなく創作の準備でありたい。聴き上手必ずしも言ひ上手に通じるものでない。だが深い鑑賞を重ねているうちに、よし発表はしなくても、何かひかへ目ではあるが奥ゆかしいものを身につけることが出来る。これが教養とゆうものである。盛んに創作する発表意欲のおうせいな連中のなかに、発表までの努力を試みずしていたすらによい批判を期待したり、ある場合には備けようとしたりすることも考えられる。又鑑賞の消極性は是正とし、鑑賞を單に心に止めてみたり、他人と集つて討論をこゝろみたりして、自己の独善に朱を入れることも考へられる。

とにかく体験の藝術の貴さを述べたいのである。これを宗教に通ずるものなのだからである。宗教に於ても、單に説教をきくだけでなく、それを実践にうつして、宗教的

体験を重ねてこそ、聴聞した説教も生きてくるのである。尤も宗教的体験は遊境にある人ほど色濃く感ぜられるとゆうものの、順境にあつても、みつめる眼、感ずる心さへみがかれて行けば充分体得してゆけるものである。

体験の宗教が個人並びに社会を淨化してゆく如く、体験の藝術は今や一村を、一町を一市を朗化せんとしている。ききに伊予の津倉の川柳村があり、今また十月九日をもつて岡山縣弓削町に川柳町が誕生しようとしている。これらの村、町では全村全町をあげて川柳を樂しみ、それを通して、美しい、住みよい、平和な郷土を打樹てようとしているのである。これ程のまごまりはまだないとしても、六大都市はじめ各放送局の所在地では市当局自らのり出して川柳会を援助しよき市政の成功のために努力しているのも故なきにあらずである。

さて体験藝術から、いさなり話を川柳に飛ばしてしまつたが、川柳が何故体験藝術なのであろうか、体験藝術とは大衆自らが創作し得る藝術とゆう程の意味をあたえておこう。俳句又は短歌も同じ性質をもつているともいえるのでこれから俳句、短歌をひとつひとつ吟味してみようと思つている。

俳句の季節とゆうものは十七音字の短詩型文学の眞髓ともゆうべき象徴の極致である。季節の約束にしたがうことによつて手際はよく消略の目的を達することが出来る。しかしこの季節も任意に用うることは許されないので、一つの制約ともなり、枠ともなれば荷厄介である。俳句は風柳人と称する人々によつてはじめられ、うけつがれたためか「や」「かな」等の切字や文語、雅語の使用が常識になつてゐる。「や」とか「かな」は絵画に於ける「ぼかし」にあたる。空気をたくみに醸成するには成程便利である。だが雪が降つたら用もないのに供までつれて作句にぶらつき女房に「我が子なら供にはやらじ」と叱られる風流まで生れるのである。

季節を用うることにより、又切字を心得ることによつて誰でも簡単に作句して俳味の世界にひたることが出来る。しかしとにかく俳句と川柳の區別は袴と着流しだと路郎先生はたくみにたどえておられる。俳句と川柳に関しては路郎先生の新川柳講座三三頁以下に評論されるから一読研究を希望する。

大衆の創作し得る藝術としての俳句はたしかにかたさをもちつてゐる。熊さんやミーちゃんだつて袴をはけないわけ

ではない。だが彼等は袴をはきたがらない。何んでもいいから十七音字をならべてみる、話はそれからだといふうなことは俳人にはとても出来ない藝当である。勿論それは川柳にもならないかも知れない。だが五、七、五の音調は日本人の身についたリズムだから何とかなる。何とかなつたところから、川柳らしい芽生をのぼすことはさして難事ではないのである。

「近代文学としての川柳」の中で川柳の系譜については俳のべたが、川柳と俳句とは俳

# 教育楽器はヤマハ

## 日本楽器

第一丁二丁目橋本区南  
電話 3413







突き返す程の元氣も無い賞與今治市一  
利腕に縋帯してゐる十二月  
城山の見えるベンチで日向ぼこ  
もう切れる電池をもつてけつまづき三原市正  
履歴書を書きく大晦日を迎え  
椅子に這ひ椅子にすがつて子を育  
饑けの辭改札待ちあぐみ愛知縣吐  
晚酌は健康法の粋で飲み  
藝術家志願生徒は純なもの  
ハンストもまだガンデー程瘠せてい兵庫縣無  
よく光る靴はモチンと揃えられ  
編み棒の尖が射るよにこちら向き  
此の雪を始踏へ送る母があり愛媛縣曉  
三ヶ日せめて子供と輪にならう  
パス明らすこうし酔つちが乗つて  
茶柱に天光々は嫁くつもり金沢市陽  
其後は人眼の関のやる瀬なく  
十二月今日も留守居をさせられる  
独り者敷つ放しの匂ひで寝兵庫縣夏  
わが理想捨てさせぬ妻實れてる  
犬曰く君の匂ひは善人だ  
二階借氣のないアバ、して上り岡山縣鉄  
失恋のやけくそ朝まで歩いてたれ  
徹切の名残すき焼酎んで居  
牛使ふ事も教へて手傳はせ岡山縣一  
駅前小店ばかりがよくはやり  
前身は何であるうと僕の母  
投資りは買ひたくもなし金もなし和歌山惠  
越冬資金忘年会を先づ開き  
日の丸を胸に息子が還つて來香川縣朝  
掲示板それから後は消えており  
衣すれをさせて嬉しい嫁歩き今治市醉  
何所をどうやりくりしたか春の  
妻の看痔する笑はせるぞけふは富山縣三  
襟立てたオーバー座談に喰ひ込んだ

ウインドへ引きつけられる懐手鹿見島華  
膝組をかへて式辞をもてあそび  
北海 道行路  
汽笛汽笛北緯四十度の吹雪貝塚市梵  
官費だよ炭もつと注げもつと注げ  
座席券二枚買うたが待ち呆け貝塚市清  
ミスタペコ坐れば忽ち賣り盡し  
カストリを呑んで小心なぐちを云大阪市五  
卑屈ではない重役の靴を拭く  
アイロンへ一寸待つてどうれし日大幸田一  
スト騒ぎ忘れた様に初日の出  
ブライドなんかかけて長屋越してゆく大阪市司  
同権をブロンズに種々おしえられ  
枕して藥袋を見飽く程熊本縣無  
二度三度不安に止まる聴診器  
初詣で今年に妻と呼べる様奈良縣箇  
餅を搗く音金詰りでもなさそうに熊本縣一  
往來へ背中を見させて紙芝居  
農家もうお芋の如くほつとかれ愛媛縣旭  
かばかりの金でウインド見て廻り  
進学の事もあろうに目白とり岡山縣櫻旬樂  
一級酒早や鎗錆びが出そうなり  
朝夕に人にもまれる身をかこち池田市木  
親切と言はれ貧しい家に住み  
ボーナスをあててにしないやうと言鳥取市重  
立候補嘘嘘嘘でごまかした  
見習ひの看護婦キツス不潔がり新潟縣清  
ライスターもケースものこし入院し  
エチケツトレディーファストが知り滋賀縣木  
廣告の近所譚ることも書き  
アベツクでわが世の春の歩き振り滋賀縣幸  
よそゆきの声で男を誘惑し  
約束を破つたついでに嘘もつき滋賀縣文  
ごまかす氣か男煙草を吸ひつけた

事象に対してその不合理にい  
きどおる心は美しきヒューマ  
ニズムのあらわれである。人  
間愛から出たものである。又  
個人的に己に対して怒をぶち  
まけるとしても不平をいだけ  
己の心へのいきどおりでしか  
ない。これがどうして愛に通  
じないといえるだらうか。尙  
又そうした自覚と反省を通し  
ていきどおるべきいかりを相  
手に爆發させないさしたらそ  
れは社会調和に、人生調和に  
役立たないだらうか。路郎先  
生はいつもいわれる。句をつ  
くるものは腹を立てない。腹  
を立てないのではない。腹た  
ちを句にしてしまふから腹だ  
ちが表面に出てこないのであ  
る。さう立て、神佛とはいわ  
ないけれど、全く宗教と同じ  
結果をもたらす。これを川柳  
の救ひださ考える。川柳以外  
の藝術でもこの作用をいとな  
むかしのないが、川柳程の直  
截的ではないのである。

四 川柳人と宗教人

藝術も宗教も精神の問題で  
ある。藝術にはいろいろの素  
材が用いられるが、素材は藝  
術の媒体となつていられるだけ  
本質は作家の精神である。そ  
の精神が創作するしかつ鑑賞  
されるのである。藝術は精神  
の糧である。宗教が精神のた  
めに存在することはいうをま  
たない。眞善美が聖に通じる

以上、藝術家即宗教家或は宗  
教家即藝術家である人は文化  
史上多数にその名を教える。  
だが彼等はいづれも天才であ  
る。藝術川柳は百万の凡人を  
して宗教と藝術の醍醐味三昧  
境に至らしめるものである。  
その醍醐味や三昧境は逃僻  
や厭世によつて得られるので  
はない。苦や迷の真相を克服  
するために、正々堂々と苦と  
取組んでいのが川柳人であ  
る。恥以上の生活を実踐する  
ことによつて、生活苦にまけ  
ず、人生苦生老病死にも強靱  
たり得るのである。それは絶  
對他力と佛にまかせきり、煩  
悩を断ぜずして涅槃を得、往  
相還相の好理を顯現して、せ  
ずにおれない境地より世のた  
め人のため奉仕しようとする  
宗教人と全く一致するのであ  
る。

男らしうやつていた日にや  
食へません 豆秋  
句主豆秋氏は男らしくない人  
では決してない。路郎師の門  
下でも、苦勞人中の苦勞人と  
さいてゐる。彼が苦の内にあ  
つて苦にまけず、ささり切つ  
た、禪門の高僧のような生活  
が出来るといふことこの秘傳を  
句を通してみることが出来る  
のである。

針金ヘグサツと名刺さ入れ  
たり 豆秋  
無常觀の句である。事務デス  
クの上の小さなあたり前の出





五世 鯉齋 佃 (上)

富士野 鞍馬

天保八年の柳多留百六十五編に

川柳の随神らしい佃と鯉花雪

といふ句がある。四世川柳時代に岸姫松連の鯉齋佃(ナマグサイタツクリ)と琴柱連の五葉堂鯉丸とが随神のように謳はれてゐたことがわかる。鯉丸は佃よりも早くから柳多留に見え、文化九年の六十二編に

台所の味噌はなれると辛くなり 鯉丸

が始めで、それから終編まで活躍してゐるが、元來年もいつていたし、武士であつたので、魚屋の佃の方に五世が譲られたのであろう。前掲の句にも「佃と鯉」と佃の方が先になつてゐるところから察しても、佃の方に人氣があつたといへる佃の句は文化十一年の六十六編に始めて

雪舟が不二三幅の一と成り 新造の無心一々指を折り 後足は槍舞台もふんだやつ

雨も田へ落す自在の御神力 しんぼうがよくて廻らぬ事はなし 黒牡丹たわけ花屋に聞て見る つめられる息子にいたむ母の跡

の七句が見え、この時二十六歳で選挙もしてゐるところから察すると、もつと前から作句してゐたと思はれる。当時の元老雨且、有幸、木賀、錦重等の句が佃選挙の中に見られる。その後

甲ひの崩れすだれをおろさせる 奥家老翁を失念仕り 善を積込んで弘誓の舟へ乗り

といふ風で、文化十四年には女流弟子鉄扇女と、佃島住吉社額面会を催し

義にうへてその名をこわす 首陽山

といふような選者風の句を作つてゐる。 文政になつて油が乗つてうまい句も見え

宿下り朝寐の蚊帳も片はつし (七三)

恋無常中の仕切に土手一つ (七二)

玄沢も心なき身はずぐ通り (七二)

番づけの声は娘に初かつを (七二)

才藏の替れば飯をこげつかせ (七二)

よめぬ字はきいたし文は見せられず (七三)

涼しさは墨絵の松を敷いて寝る (七四)

乳貰ひの掃りは夢を抱いてくる (七五)

土蜘蛛の身ぶりてなめるこぼれ酒 (七六)

盧山西湖も八景に及ぶべき (七七)

白拍子にも降参はあなごられ (七八)

陪臣の領地冥加な歌によみ (七九)

蝶飛んで猫二三尺つりあげる (八〇)

どその篤学物識振をうかがわれ、文政七年は賤丸が四世川柳になつた年で、佃は三十六歳

千人前の橋きは大根武者 (八二)

と「徒然草」を詠み 柳宮へ御免の杖も古來稀 (八三)

鶴見と亀有蓬萊の左右也 (八四)

いる。豆秋氏のどの句も悟りの境地に達している。だがこれは一豆秋氏だけではない。古川柳からも、現代川柳の他の作家のうちからも数多くその作家のうらみから発見することが出来る。

五 川柳と教育

戦後の日本教育が教育の本道に立ちもどつて、自覚と体道から出発しようとする努力していることはよろこばしい。如何に注意ぶかく科学的に用意されても、水を飲みたがらない馬に水を飲ませることが不可能である。よし飲ませ得ても消化不良か、彼の栄養にはなり得ないのである。学びたいものを、学びたい時に学ばせることが教育第一の要件である。しかも学びとらせる方法は頭より手、心よりもからだを用ひるように習慣づけなければならぬ。そこでこそ学んだものが身につく。血となり肉となり、如何なる人生の場合にも應用自在の抵抗力となるのである。

教育の結果得られるものは絶対の自由でありたく、眞の自由と一致したいのである。そのためには教育を単に理屈を教へるものでなく、社会の円満な調和を念願する絶対の教育まで高めなければならぬ。絶対の教育は宗教ス育以外に之を求めることが出来ない。宗教教育によつての

み無理なき権利の行使と、義務の遂行を可能ならしめる。いや権利や義務以上に、與へ、與へ、與へつゝ生活、期待せざる「與へられたるもの」によつて生かされる生活をたのしむ。これこそ人間の達し得べき理想の世界であらねばならぬ。

かつて「詩による修身教育」といふのを説んだことがある。藝術と道徳をむすびつける企である。私は今るると述べて来て、藝術と宗教、ことに川柳と親鸞教のむすびつきについて吟味した。

特殊の学校を除いて信教の自由を尊重する結果、一般公立学校に於ける宗教教育は非常に困難である。だが宗教教育はむしろ、かつての習育偏重の明治教育を克服するためにも、どうしても取入れられなければならない。その際川柳による宗教教育こそ最も当を得たものではなからうかと考へる。

而して具体的に川柳が如何にして発展して来たか、さきへ豆秋氏の句あるいはそれ以上の水準に如何にして達し得られるかを考へてみることは必要かくべからざる試みと信じるのである。

(一九、一一、一四) ▼前号發表の「川柳建立」と本稿と發表が前後したので、その積りでお読み下さい (編)

と江戸泰平を讀えてゐる。續いて次のような健吟を發表して

乳貫ひのかんでふくめる夜明まへ (八七)

尼寺の櫻梅男の品定め (八六)

いゝ景色人丸今に筆を持ち (八七)

金五兩取るべらぼうに出すたわけ (八八)

鳥へ鳥忍んだ果は鳥の沙汰 (八八)

放馬いざり討死する覺悟 (八九)

披露する句も細すれば法の声 (八九)

宇治の綱代に甲申の土左衛門 (九〇)

漆川これ楠公の夢の跡 (九〇)

五月雨の日和見紹巴と順慶 (九一)

肌につきのいゝめりやすが御意に入り (九二)

三日喰ふ雄煮で知れる飯の恩 (九二)

拘子程筆では書けぬ文字燃屋 (九三)

文政八年十二月二十日の葛飾納会には (九四)

鳥のまぢ一丸が紋を土産にし (九五)

娘やぼ兄の友達一人へり (九六)

と当世風を見せ、翌九年正月二十四日の浮世小路百川楼で盛大に催された天川屋儀平百年忌句会に (九七)

後家のみな泣せて廻る吉右衛門 (九七)

それまでは憎き敵の毒もいのり (九五)

五段目を蛇の目で包む狸町 (九五)

等義士を詠んでゐる。 (九五)

全年八月には風松の主催で、四世の向島建碑末廣大会有り、その入選句が九十七編から百編迄に収録されて、仰の句は (九七)

都では梅を盗まれたと思ひ (九七)

廓の書錦の裏に異ならず (九七)

鯨洲から道にのまれる女旅 (九八)

酒をやめたれどやつぱり鏡がなし (九八)

といふ風であつた。その後の数年間も (九八)

二足獅子かぶりふると十二文 (一〇〇)

名物のたび重くなる通し駕 (一〇〇)

鹿にまごばり掃溜へ入らせられ (一〇〇)

実に治國下直に武具の拂物 (一〇〇)

たが見てもあたまで知れる僧の墓 (一〇〇)

ぐにや富の頃にこんにやく鳥はやり (一〇〇)

今やうで一曲かなで館を賣り (一〇〇)

仲國の氣ざり問女へ密使來る (一〇〇)

等々博学の句を見せ、時代風俗の記録にもなつてゐる。 (一〇〇)

文政十一年の正月には風松

主催の王子稻荷奉願会があり、四世の露拂ひとして選評もして (一〇〇)

野馬台のやうに毛虫は神へ下り (一〇〇)

半ふりは打出し楯は引かへし (一〇〇)

全年十二月の武蔵野納会には (一〇〇)

雪の頭痛でかんざしもまげんした (一〇〇)

といつた通人振の句も見える客二つふして夜鷹二つ喰ひ (一〇〇)

は文政十二年二月の和歌堀連月並会での作で、研究家に時々使はれてゐる句である。その年の六月には珍らしく麴町の麴丸の会へ出席して麴丸の選に (一〇〇)

やるもおしかざるもつらし母の鱈 (一一一)

がある。又同じ六月に上野櫻木の会で (一一一)

足の多將門二十一里すゑ (一一一)

これも時々研究に採用される句である。 (一一一)

この頃の「柳多留」は江戸市中各組連の句会報であつたから、その収録されてゐる句は必ずしも作句の時が柳多留の編の順になつてはゐない。後の編に前編のよりも古い句が載ることには大保になつていつそ多く見られる。これは柳多留を研究する上に重要なことであるから注意を要することである。 (一一一)

### 不朽洞会から

▼古川麗花麗氏(ホノルル)はハワイタイムス元且号に「春委女十蕨」を發表▼美山快夢起氏(ホノルル)はハワイタイムス元且号に「寛政十句」を發表▼新川博也氏(大阪府)は一月から市電交助会へ勤務されることになつた▼戸倉善天氏(兵庫縣)は二月末頃に、沼貫村で婦人会の總會を催し併せて遺家族の慰安会を開催されるとのこと▼河村日瀧子氏(鳥取市)は一月下旬に二男を儲けられたとのこととおよろこび申上げる▼前山北海氏(ホノルル)は日本米布時報社を創設、一月号を刊行されたなほ再度來日、一月廿九日に川雜本社を訪問された▼藤井友郎氏は三月一日出帆のゴールドン号で帰朝されるのでハワイ支部二日句会は同氏の送別句会を兼ねて催されることとなつた▼黒田笑泉氏(岡山縣)は「夕刊山陽」の第二回寄稿者文藝川柳「雪」の第一席(賞金千円)に入選された句は「共線き雪へ長靴譲りあひ」▼前田伍健氏(松山市)から「四國川柳放送角力」は第七回益々盛況です。選手も現役一流どころが出てゐるので観合があり、川柳普及にはよい結果をあげてゐます」とのこと▼三輪曉翠氏(ホノルル)はハワイタイムス元且号に「國藝の醍醐味」を執筆▼高鷲亞純氏(大阪市)が詩人藤村青一として詩集「秘奥」を大阪市阿倍野区晴明通一ノ四〇不二書房から刊行された定價一〇〇円▼丸山

### 社の黒板

▼本社句会は毎月第一土曜に催してゐるので各地から、この日に來阪される方々は方障繰合せて顔出ししていただきたい▼三月は四日午後六時から、南区豊谷仲之町(三休橋南詰東入浜側)の大宝文化会館三階で開催する。初心の方でも出席されたい。乗組「平社員」路郎選「散髪」豆秋選「愛人」兼選▼「動靜」へのお知らせは、句会であれば、句会の催された日時、場所等を、出版や慶弔等に就ても出来るだけ詳細にお知らせを乞う。

高級化粧品容器には当然!

おマギンの……

## 黒硝子

大正十一年四月

社 株式會社 三興

由 銀 川 四 七 番 電 話



# 秋春筆雜

## 電柱

種瓜平

麻生先生の事務所の窓の近景に一本の古ぼけた電柱がある。私ははじめてお伺ひしたとき何かしら窓の風景に好もしさを覚えた。その好もしさの原因は遠景の高島屋のビルでも、ウロコ雲の青空でも、バラックの屋根の波でもなく、この古ぼけた電柱にあることを三回あまり訪問してはつきりわかつた。全体が黒つぽく木柱がゴツゴツ揃くれば、烏のように黒いトランスが四つあり、とまり木に雀が止つているような瀬戸物、それに結びついた針金が池の電柱との連絡、上下のトランスとのつながりをネチツヨクしかも遅ましくガツツ結んでいる。その古さその遅さが朴訥に見えて私の心を引いたのであつた。

イルミネーションにジャズのミナミの真中にこんな古くさい電柱があるとは誰が気がつこう。誰からも忘れられた電柱、だがよく注意すると大阪中何処へ行つてもこれに似た無細工で時代遅れの電柱が一丁置きぐらゐりに並んでいるのである。忘れられた電柱に氣づいたとき、私にふと幼な心が甦つ

た。大人になつての電柱はせいぜい犬の小便をひつかけの道具の程度にしか漫画に使わなくなつたが子供の頃の電柱はお友達の一入だつた。鬼ごつこのとき、犬が小便する少し上の方に鼻をくつつけて目をつむり、耳のあたりを両手でぶさいで、「もういゝか」とやぶ、ぶいつと耳をすますと電柱がウオーンと鳴つている、電柱の芯に心があるように思えた。追つかけこつこをして電柱に抱きつく、おでこをおぶつつける。隠れると体一つが充分に消えた。夕方になると電氣屋さんが自轉車に乗つてきて、金の足場を一つ一つ雨蛙のようにちよていく。パツと町内が明るくなる。

こんな風に憶ひ出すと限りなく電柱がながくは行くとなつて来る。先生の事務所へ行くこと必ずあの黒すんだ達しい電柱を眺めて一とときを意心に滞るのである。

### 私は斯う考へる(下)

丸山 司 割平

川柳初期は江戸庶民の瞭らかに階級的な批判を強くした。従つて

恐らくは没個性的なものが多かつたのであると考へられる。階級的なものから個性的なものへ發展する術を知らなかつた中末期川柳柳は憐れにも狂句に墮さざるを得なかつた運命を何と見るか。総てのものゝ初期に於ける濫刺さ、多数の中から選り遺した古川柳を愛惜して古川柳から出直せと言ふ懐古的な一嘆美くしい單純な希望と冷笑に對して我々は一体どうもたらい、と言ふので。模倣し脚足も作れと云ふのが。久良岐は既に中興し劍花坊は新たな道道を振り開いた。止揚した世界はもう一つ新しい段階を要求している。それは路郎師によつて作られていゝと云える時情豊か気分分の句である。封建の重圧の下に教育を興えられなかつた江戸庶民のそれであるからこそ放胆な反抗と露骨な性慾と、そして愚かなるが故にこそ必然的に狂句に墮した運命を現代の我々がその儘も一度繰返さなければならぬ何等の理由を持たないものである。

それは川柳が一々皆詩になつて了ふかと首ふとそうではあるまい。川柳に詩が多くなり詩の句ひが強くなるに止まる。川柳から批判句を失つたら川柳ではなくなつて了ふ。石原電電氏の説は確かに一面の眞実であつて川柳の総てが詩ではなく川柳の総てが絶對詩になつて了つてはいけぬ。氏も茫漢と川柳が高度な詩の如く錯角してあるであらう人々へそれは川柳を誤る者として措けりしてその本質に論及されたのである。敬意を表す可きである。だが氏の非詩論は過去の川柳に於てのみ眞実であつてそれは川柳を欽石の如く永劫不變のものとして取扱ひ、新しく起る新しき形態と範疇を頑なに拒否し続ける孤高ではあるが、時代的に取り残される悲壯な最後の響に抱える人のふり絞る声となるのである。詩論と言ひ非詩論と言ひ、たゞ單に五七調であるから詩と思ひ或は敘事詩や劇詩と並べて廣義に詩の中に並べざる詩論者と、絶對詩の定義に過去の川柳を當てめて悲憤慷慨する非詩論者と詩論と、非詩論は餘先の合はない論試合をしてゐるのではなからうか。それとも一方的に試合をしてゐる氣負つた錯角に喘いでゐるのだろうか。その何れもが川柳が幅をもつた複合体であり發展性をもつた動物であることを知らないでゐると斯う私は考へる。

総て人間の生活感情を短詩型に盛らんとする場合簡潔にして魅力ある表現を以てその理念を生彩あるものになければならぬ。穿ちが即ちそれであつて言語表現の有効な技巧的一手法である。それが対象を批判する場合その内容を深く衝いて暴露する簡潔な言葉、詩鉄殺人となるのであつて、之は詩川柳に於ては必要なる表現手段である。即ち詩の表現をより効果的ならしめる人間の肺腑を衝く鋭さ、魅力ある辞となる。穿ちは從來理智的な調伏に過ぎぬ。従つて穿ちと云ふ習慣的な批判的觀念はも早現在に於ては鋭さと云ふ言葉に置換されていゝものである。次に韻律の問題が残つてゐる。字井無愁氏に川柳には韻がないから詩ではないと言ふ。然し日本語に於ては不幸にして押韻は不可能に近いのではなからうか。勿論韻律を持つに越したことはないがそれは詩情を殺して了ふ結果になり易い。明治第一の詩人泣菫にして失敗したと云ふ。俳句にしては短歌にしては五七調で満足してゐる。近代詩の自由律に於ては況んやである。氏は始め俳句は詩であり川柳は散文であると言ひ、古方氏の詩の定義が違はれるや詩の本質である情緒と韻律の中あくまで感情と理智を衝かれる可きにかへはらず川柳だけの問題でない韻律を持ち出して原始的な詩歌の稀なる例を示して川柳の非詩を断定された。川柳は五七五調をとつて厚り日本語として詩の條件はこの点備えてゐると見るべきである。最近の進歩的俳句には生活感情をむき出し 諷刺の句がよく出る」と云ふ。山陽新聞の俳句の第一席に立派な川柳が千円の賞金をもつた、それは生活感情を詩へば俳句も川柳と余り変らないと云ふこと、即ち俳句が詩であるなら川柳にも詩であるものがあることも云ふ事を証明することにもなる。物事を一つ、嚴重に採り上げて列つて決めれば必要のない場合がある。川柳がそれである。川柳は國都都市の様なものである。色々な人が集つて詩的な情調を作つてその中に生きてゐる。川柳は幅を持つてゐる。小説もあれば劇もある詩もある。その上に動くのである。変化生長する動物である。そしてこの動物は詩型と云ふ性質を持つて居り、過去現在よりもより高き詩性に生長發展しようとする運動を起してゐる。

川柳は複合体であり矢張り川柳





いのちある句を創れ



投稿清規
用紙は原稿用紙
文字を正
確に開削月日及場所記入
切毎月廿五日
投稿先本社宛

本社新春句會

一月七日 午後五時半
於 大宝文化會館

新春句會は一月七日夜午後五時半から
大宝文化會館三階で永田里下五氏司會の
下に、中島生々庵博士の挨拶並に作句奨
励に關し、川柳不朽會賞と路郎賞の提
案があり一同賛意を表し、今夕の句會か
ら突襲することとなつた。次いで初笑ひ
の談、手を当夜出席の不朽會會員とし、
全員の投票によつて行ふこととし、投票
にうつつた。開票の結果、里十九、(一票)
(一票)豆秋(二七票)鮎美(二五票)瓜平
(二一票)生々庵(二〇票)の五氏當選
次点香林(一一票)、路郎主幹の新春の挨拶に引続き五氏の初笑ひ漫談、瓜平、栗
雨氏の漫才に笑ひの潤滑、最後に兼題
「銀行」没食子、「餅」鮎美選の披露があつた。路郎主幹がいきさか健康を害されて
いたので選句が遅れたので、香林氏の
選外の漫談があつた。斯くて「日の出」
路郎選の披露の後、賞品授與が行はれた。
一等万葉、二等草葉、三等愛論、四等
正司、五等淡舟、六等文葉、七等迷宮、
八等野介、九等勢三、十等樗木、十一等
角嵐、十二等豆秋、十三等種美、十四等
風路、十五等綠雨、十六等水都、十七等
没食子、十八等修三、十九等瓜平、二十
等副骨の諸氏入賞。一等二等は同点であ
つたが三才入選句の多い方を高位とし
た。九時過ぎ盛會裡に幕。(幹事)
出席者 路郎・默平・正則・文葉・里十
九・古方・鮎美・樗木・太路・白泥。

種美・風路・笛生・水都・紫香・淡舟・
芹穂・更生・正司・翠光・万葉・香林・
角嵐・勢三・綠雨・好郎・豆秋・没食
子・無名林・迷宮・夏六・副骨・一路・
季贊・義次・修三・南柳・春葉・瓜平・
いわを・百生・藝彦・梅里・愛論・野
介・一貫・トシエ・史葉・生々庵・栗・
悟郎・霞乃・梨里・一步

兼題「日の出」 麻生路郎選
初日の出でてら姿へ眩し過ぎ
一筆で書いた日の出の朱が足らず
掌の筋へも初日流れこみ
旅の宿日の出の位置が違ふ也
大晦日日の出の軸をかけて寝る
原稿紙破つて日の出へ杖を引く
春夏秋冬日の出に鶴の軸をかけ
ナオトカの日の出に余りせつ過ぎ
せがまれて日の出をいはず過ぎ
初日の出散歩と遊ぼう大も知り
炬燵から抜けて日の出へ手をこすり
照らすものみな照した初日の出
初電車日の出を指して突つ走り
初日の出松を離れる二三寸
初朝も上々日の出を待つばかり
成金の趣味を日の出の軸に見せ
日の出から嫁が阿呆な職をつぎ
日満子

兼題「餅」 水谷鮎美選
今年こそ選つた兄が搦いた餅
餅の香と共に出来たふさふさ手
嬉しいことの一つに餅ふくれ
配給の餅米四合を乳にひき
さあなんば食なな餅の返事なり
このピルも何処か餅の焼くにおい
三日目は餅であしるふ泊り客
ホケットの餅を焼いてるさりのり
やけかけた餅へ電話がかかって来
何んば金を出してもなかつ餅が食え
頭敷よんで雑煮の餅を入れ
ナオトカは喉寒かろう餅をやく
お鏡餅に笑南天の落ちたまふ
孫も来た子も来た餅がよくふくれ
はるばると情濃の母の餅が着き

兼題「銀行」 市場没食子選
千円が出て銀行はぼつとされる
銀行の前で小切手渡さる
支店長大事な客え腰を上げ
銀行は千円札で手が省け
百万円銀行で貰ふ手がふるえ
銀行へおやじは印形だけで行く
銀行から年玉のくるようになり
行員の絞うりつける顔を選び
銀行の今日あは預けるドアを開け
銀行に勤めやつばり金詰り
銀行がけちくして町の奇附
銀行へポツポツ野ヤゲンと出じ
銀行もお祝に来る百万円
銀行の別の窓からまた呼ばれ
風呂敷のまゝではいらぬ預金口
儲からん男銀行に用があり
銀行は千円札でチトたるみ
銀行のカレンダーかけて鹿接間

品質優良
先カペン
TACHIKAWA PEN
大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社
タチカワペン
タチカワセム
タチカワ画紙

好集路太野方勢古里文没生
郎路舟方舟舟舟舟舟舟舟舟
兼題「銀行」 市場没食子選
一月二十一日 於 王子神社
紙コップ・千円札・やりくり・雪
紙コップ・紅にちませて御返盃
紙コップ夜汽車の窓に並べられ
紙コップぐにやとこぞと酔よ出る
紙コップ手品の種となりけり
紙コップ車もよけて渡す紙コップ
紙コップモーイの友の手嬉し
紙コップやがて平和も来るをん
紙コップやがて平和も来るをん
地下足袋の顔活きする紙コップ
千円札一度は人に疑はれ





### 編輯室にて

▼前号も好評だった。「川柳」は  
何処までも諸君の「川柳」である。  
どうしたら「川柳」がよくなるか、  
諸君も一緒に考えていたのだ。  
きたい。▼本号の表紙(目録)は  
岩田清画伯の力作である。▼句評  
「川柳街」は例によって福田山雨  
樓氏のきもいりてよい眺め物をつ  
くつてもらった。少し長かつたの  
で上下にした。▼戸田古方氏の「川  
柳と宗教」は、前号發表の「川柳  
建立」と組み込みが前後している  
と筆者から注意をうけたので編輯  
子が恐縮している。本号の「川柳  
と宗教」をお読みになつた方はも  
う一度前号の「川柳建立」を讀み  
直していただきたい。▼富士野鞍  
馬氏は「五世川柳師齊仙」の稿を  
寄せられた。例によつて勢力の結  
晶である「種瓜平氏の「電柱」は  
川難波渡津所窓外の電柱を纏  
てごも時代を迫想したもの、前  
号表紙参照このページで、しば  
らくタバコのことを書かないが、  
タバコと疎遠になつた訳ではない。  
い。旧冬十一月号、十二月号の表  
紙がラッキーストライクの画だつ  
たので廣島縣竹原町の専賣公社に  
勤務している柳慶クンから、あの  
表紙を見るなり眼をキラキラ光ら  
し納税の印が捺されてあるかどう  
かを探したんだぞうな。商賣でヤ  
ツは忠実なもんや、そしてハハア、  
これは画かと、ガツかりしたぞう  
な。▼タバコの煙りの行術をジツ

と眺めていて、そのひろがり方の  
素晴らしいのは驚く。ユラユラ、  
ユラユラと揺れているが、みる  
うちに部屋一ぱいになつて、  
それが窓から戸外へ流れて行く。  
この調子で、「川柳」がひろがる  
らんもんかと思う。▼夕食の時間に  
ラジオで、笠置シズ子のホームラ  
ンウギを聴く。唄つてると云う  
より、せい一ぱい口を開けてドナ  
ツてると云つた方が近い。それだ  
に聴いているうちに段々ユカイ  
になつて来る、その魅力こそ彼の  
女の全部である。ハリキッてる、  
ハリキッてる。何事にあれこの調  
子でやることは一つの生き方だ  
である。ナンとお立会。(路)

### 動 靜

▼本社二月例会は二月四日午後五  
時半から大空文化会館で開催。川  
柳大阪南支部句会は二月廿四日午  
後五時半から阿倍野王子神社で開  
催。▼大阪通信病院川柳会は二月十  
一日午後一時から開催。▼南区医師  
会文化館川柳会は全場変更で田中  
島耕居で開催。▼南海鉄道川柳会は  
二月廿二日午後四時半から開催。▼  
関西配電川柳会は廿五日午後一時  
開催以上何れも路郎主幹出席。▼川  
柳下関支部は一月廿二日、小門鉄  
道寮で新春句会を開催。▼川柳姫路  
支部では二月四日夜、一題五十句  
吟を開催。▼岡山鉄道局俱樂部川柳  
句会は二月十一日岡山市第五鉄道  
寮で開催。▼西日本鉄道人川柳大会  
(第七回)が四月廿三日(日)十  
時から廿日市鉄道職員会館で開催  
されることとなり、麻生路郎主幹  
の「いのちある句を創れ」の講演  
がある。▼「川柳文藝」(大阪市)は  
編集担当の免許郎氏の病臥と経

営難のため十二月を  
以て休刊する旨發表  
された。  
▼川柳噴煙プリント  
版が熊本局私書函四  
五号川柳噴煙吟社か  
ら創刊された。▼ハワ  
イタイムス一月一日  
号募集の川柳「新」  
の天位ワイロー社賞  
は柳葉氏の「新記録  
水泳日本の朝を呼  
ぶ」であつた。▼渡辺  
曉童氏(愛媛縣)は  
十四字川柳集「夢」  
の増補訂正版を今治  
市森見通二丁目日沙風  
川柳社から刊行され  
た(非賣品)。▼東野  
大八氏(今治市)は  
旧冬十一月十五日、  
大洲支局から今治市  
廣小路新愛媛新聞の  
本社編輯局長に榮  
轉された。▼木村藍田  
氏(大阪市)は無名  
林と改号。▼山川陽人  
氏は一月十三日十六  
時貝塚市の千石莊病  
院で永眠された。謹  
悼。▼上田宇都羅氏  
(奈良縣郡山町)は  
一月十三日二十時に  
腸捻轉のため入寂、  
行年六十九歳、哀惜  
に堪えない。▼宮尾し  
げを氏は東京都中央  
区銀座二ノ一ふじや  
紙店內江戸小唄全集  
刊行会から江戸小唄  
全集第一期五巻を刊  
行される。一卷  
二八〇円

シマズに ヨクキク

## 大眼目薬

結膜炎  
トラホーム  
つかれ目

至天堂製薬

趣味と教養の殿堂

## 松坂文化クラブ

會員募集

目録  
 雜道(小原流・末生流)  
 茶道(表千家流・宗徳流)  
 洋鼓・書道・日本書  
 樂曲・樂樂  
 手鼓・古典・新舞踊  
 長唄・小唄・謡曲  
 服飾デザイン

詳細お問合せは  
七階文化クラブ事務所へ

松坂屋  
大阪日本橋  
電用一七二番

Made in Occupied Japan

募 集

課題吟募集  
煙草(十句) 弘津柳慶選  
(四月五日締切)

病院(十句) 中島生々庵選  
(四月廿五日締切)

毎号募集

近作柳樹雜詠廿句 麻生路郎選  
川柳塔(雜詠) 麻生路郎選  
文章(評論・研究・感想其他)  
(廿五日締切)

### 投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。  
▼「近作柳樹」は一般作家の雜吟を募る。  
▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。  
▼「川柳塔」への投句は不朽詞金具に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

## 川柳雜誌

第五卷 第三号

一册 (送料三円)  
金三〇円  
金一九八円  
金三九六円

(戰轉禁)  
牛ヶ年概算 金一九八円  
一ヶ年概算 金三九六円  
昭和廿五年二月廿五日印刷  
昭和廿五年三月一日発行

大阪市都島区都島五丁目二番地  
發行所 麻生 幸二郎  
大阪市都島区都島五丁目二番地  
發行所 川柳雜誌社  
電話日語 大阪七五〇五〇